

私は忘れない

有吉佐和子



わた
和



定価 280 円

新潮文庫 草 132 E

昭和四十四年十一月十五日 発行
昭和五十六年三月十五日 二十七刷

著 者 有 吉 佐 和 子

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一六二
東京 都 新宿 区 矢来 町 七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四四〇
振替 東京 四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

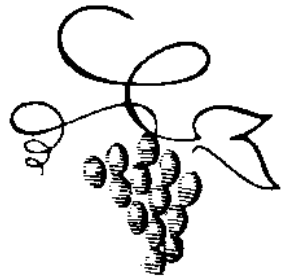
Ⓢ 印刷・東洋印刷株式会社 製本・株式会社大進堂

© Sawako Ariyoshi 1969 Printed in Japan

新 潮 文 庫

私 は 忘 れ な い

有 吉 佐 和 子 著



新 潮 社 版

1908

私は忘れない

夢の汗

冷房完備のスタジオだが、カメラを備えてじっと万里子を見詰めているカメラマンの額には大粒の汗がにじんできていた。

「アゴをちょっと上げてごらん。目線、もうちょっと下。うん、よし。あ、笑くぼが出たよ。いいね、かわいいな」

かわいい、かわいいという言葉が暗示になって、万里子のポーズが柔かく自然に整えられる。頃合を見計って、シャッターが切られた。

「すぐ着かえてね」

「はい」

「いかすぜ、万里ちゃん。新興の化繊会社にしちゃ、大変なセンスだ」

「そうかしら」

「太鼓判を押すよ。年内にはブームが起るな、門万里子の。来年はニューロン繊維も大当りさ」撮影中はモデルをおだてにおだてあげて、最上のコンディションに持って行くのが、婦人科と呼ばれる分野にいるカメラマンの常套手段なのだったが、門万里子は、この言葉を全部まともに

受取っていた。その通りになると、彼女は殆んど確信していた。

新光映画にニュー・フェイスとして迎えられてから、もう一年という歳月が過ぎようとしている。女優としての生涯に、万里子は自分を賭けていた。つまらなく放縦な生活に走ってモトもコもなくす馬鹿な真似はするまい。地味でも、励んでいい仕事でスタートを切ろう。賢明にそうきめて堅実に過してきたが、一年たてばそろそろ焦りは出る。同期生で、拔擢される者は、もうすっかり拔擢されてしまったような気がしてきた。

だが、八月に入って間もなく、巨匠水谷監督久しぶりのメガホンで、新光映画をあげての大作がクランク・インすると、助監督のチーフと、演技課長の大使が、ひそかに万里子と呼んだ。

「チャンスだよ、今度は。その日まで待ってなさい」

彼らは、何かを匂わせるようなことを云った。二人揃って云ったのだから、変な野心がないのは確かである。とすれば、本当に芽が出るのに違いない。きけば、今度の作品は水谷監督が屢々台本に自分で手を入れるので、端役が思わぬ大役になってしまう可能性があるのだという。

万里子は、もうワクワクしていた。グラマー時代がようやく去って、青春もので各社夏枯れを切り抜けようというとき、小柄の門万里子にようやく時節が到来したのだ。

撮影所内で、ひそかに万里子をマークしていると知ってかどうか、ある小さな化学繊維の会社から来年のカレンダーの写真のモデルになってほしいという注文が来たのは、それから数日後であった。十二カ月を万里子一人のモデルで通すという企画だ。

ツイてる……万里子は、有頂天になった。写真家の言葉ではないが、この秋から来年にかけ

て、私の、門万里子のブームが起るかもしれない。その予感、胸をしめつけてくるほど強いものがあつた。

「気分を変えて、今度はクリスマスにしようや、万里ちゃん」

「はい」

万里子はいそいそと、華やかなパーティ・ドレスを取上げた。十二カ月の衣裳のうちから六点が、撮影後、万里子に贈られることになっている。

カメラマンの弟子たちが、天井からシャンデリアを下したり、背景のクリスマス・ツリーを飾ったりしている間に、万里子は一人で髪型を直していた。半年もすれば、ポートルートを撮るにも結髪師や美容師がつくようになるだろう。そう思えば、今ひとりで自分の長い髪を梳いたり、結びあげたりしていても、充分に楽しく満足できた。

万里子は鏡に向つて、幾度も頬の笑くぼを出したり、ひっこめたりしていた。カメラマンが相当これを意識して撮っているのが分つたからである。映画に出ても、きっとこの笑くぼが魅力のポイントになるだろう。今までカスミの群衆や、通行人の仕出しで出演していたときには、目に立てようもなかったが、主演女優の次ぐらい重要な役どころを貰えれば、この笑くぼが無駄になる筈はない。

「万里ちゃん、用意いいかい」

「はい」

濃い黄色のカクテル・ドレスには、一面にスパンコールがついてキラキラ輝やいていた。肩から胸に大きく衿あきをくった縁に、黒びろろどのトリミングが強いアクセントになっている。

「おう、綺麗だ。シンデレラみたいだよ、万里ちゃん」

「うわア」

「そのガラスの靴を意識してポーズとってごらん。もうちょっと右足を前。そうそう。胸を張って。そうそう。うん、かわいいな」

スタアになるかどうか分らない相手でも、一応写真のモデルときまれば、カメラマンはおだてる一方である。ブラスティックのハイヒールと、万里子の頭上のシャンデリアを、どうやって一つの画面に納めるかと考えながら、彼の口は忙しく動き続けて万里子の表情を柔げようとしているのだった。

カクテル・ドレスの後は、またぐっと気分を変えて、スキー服を着た。アングラの手袋まではめる念の入れ方だ。

「暑かったね。次はリゾート・スタイルだ」

「はい」

売れっ子という意味では、門万里子より遙かに売れっ子であるカメラマンは、自分の仕事の都合から、どうしても今日一日で十二枚の撮影をあげてしまいたかった。次から次と、万里子を追いまくって、息もつかせない。

最初は盛夏の水着姿から撮影を始めたのだったが、万里子が、二十一歳だというのに、顔と同

じように体も子供々々しているのを発見してカメラマンはやや落胆していた。胸や腰の発育が、決して遅れているわけではないが、カメラで強調したいほどの立派さはないのである。

「似合うねえ、うん、本当によく似合う」

細い脚にぴったりついた七分スラックスの上に、タオルのハーフ・コートを着て、大きな麦わら帽子を冠った万里子を見ると、カメラマンは目を細めて云った。それ以外は決して似合わないという意味が露骨に出ていたが、万里子は気がつかなかった。彼女はニコニコしながら、帽子のふちに手をあてて、てれて見せた。笑くぼが、頬に、大きく現れた。

「訪問着だったな、次は。三月か」

「あの、私、帯が結べないんです」

それで女優のつもりかと云いたいところだったが、カメラマンは、その分を弟子に怒鳴りつけた。

「おい、さっさとしないか。時間がないんだぞ」

背景になるスクリーンは、下についたハンドルを廻せば様々に絵柄を変える仕掛けになっている。一つのスタジオが、それだけの操作で、一瞬にして芝生のゴルフ場となり、雪の山となり、ビル街になるのだった。

助手や女中に手伝ってもらって、どうにか帯をしめた万里子が、更衣室から出てくると、

「お、いい着物だねえ」

先生は目をみはった。

ニューロンという化学繊維の宣伝用カレンダーだったが、撮影効果その他を考えて、ニューロン以外の繊維製品がふんだんに使われていた。淡紅色に派手な絵羽模様の中振袖は、手ざわりのずっしりした絹地である。

「よく似合うよ。着物の万里ちゃんも、いかすねえ」

「そうですか」

万里子は、いよいよ嬉しくなつて、長い袖を両手で後からすくいあげて、たもとで胸を叩いた。あまり背が高くないものだから、中振袖が、まるで大振袖ぐらいに長いのである。

それが写真家にヒントを与えたらしい。彼は室内写真にするつもりでいたが、俄かに気を変えてしまった。

「この春、週刊現在の表紙に使った桃の枝があったろう。あれを出せ。バックはホリゾン트でいいよ。桃の花でかこんでみるんだ。万里ちゃん、ちょっと休憩しててね」

「はい」

玄関のロビーが、応接間を兼ねていて、白麻で掩ったソファがある。万里子はそつと腰を下して、振袖の模様を見た。大柄な友禅染めであった。小柄の自分が着こなして、お世辞にも褒められるとは思えなかったものなのに、先生が「いかす」と云ってくれたのである。万里子は、有頂天になる心を、ただ一つ未来のスタアという夢の貫禄で抑えていた。

「万里ちゃん、ジュースあげようか？」

先生が、スタジオから顔を出して訊いた。よく氣のつく人だ。

「結構ですわ。この着物、汗で汚しては悪いから」

モデルにくれることになっている衣裳は、ニューロン製品か、木綿ものと限られていたので、この中振袖はいわば仮り着である。それを汗にしておいては悪いというのは、これは芯がしっかりしているのかもしれないと、写真家は驚いたらしかった。

「じゃ、本でも見てて」

「はい」

ソファの横に本棚があり、週刊誌、娯楽雑誌、グラフの類がごちゃごちゃに投げこまれてあった。上等の着物を着て、手を出す気にはなれないような、古雑誌の山だ。万里子は棚の片隅に、誰も手をつけていないらしくキツリ並んで詰っている小型の写真集を、一冊ひきぬいた。

岸壁と、波と、籠を背負った女の黒い顔を、きちっと纏めた写真が表紙だった。横に、大きく「忘れられた島」——という活字が躍っていた。それは岩波写真文庫であった。

万里子は、なにげなく表紙をめくって、なにげなく本文の活字を目で追った。

「九州南端から約二七哩の沖合、黒島・硫黄島・竹島の三島は、昔から……」

「電信も電話もない島……」

「崖を削り、森林を拓いて建てられた六三戸の部落……店屋などないから、看板もない……」

こんな説明文にチラチラと目を止めながら、小さな連絡船や、竹の束を担いでいる女たち、崩れかかった藁ぶきの家、板囲いの貧しい家、四肢の痩せた子供たち、ボロボロの着物を着ている老人の写真を、万里子は、もの珍しく見ていた。

黒島の人たちの顔は、まるで南洋の土人のように、素朴で、どこか滑稽^{こっけい}だった。その風俗は、東京という都会しか知らない万里子の生活からは、かけはなれていた。文明らしいものは写真のどこにも見られない。

日本の国の中に、こんなところもあるのかということまでも考えつかぬままで、万里子は無責任にパラパラと頁^{ページ}を繰っていた。スタジオの用意ができるまでの時間潰^{つぶ}しだ。簡単に終まで見終ると、また表紙に戻ったが、万里子は棚からもう一冊を取出す気はなかった。胸高にしめた帯が、きつい。もう夕食の時間が過ぎていくから、おなかは空^すいている筈だったが空腹感はなく、その代り疲労感が出てきていた。

両手で写真文庫を持ったまま、万里子はぼんやりと「忘れられた島」の表紙を見ていた。いや、「忘れられた島」という文字を読むともなく眺^{なが}めていた。

「門さん、お待たせしました。どうぞ」

声をかけられて、万里子は我に返った。

スタジオに入ると、カメラの前に桃の枝が組まれて、造花の桃の花の色がしつこく映^はえていた。

ピンクのライトが当てられたスクリーンの前に立つと、

「万里ちゃん、さっきやったようなポーズしてごらん。ほら、振袖を撫^なんで」

手で後から袖をすくいあげる形である。万里子は云われた通りにしたが、幾分かたくなっていた。

「その格好で取り澄しちやいけない。お茶目さんの顔をしてごらん。そでをひろげて、そうそう。足首を楽にして、力を抜いて、そうだそうだ。首をかしげてごらん。ちょっと笑って。いや、歯を出しちやいけない」

彼が狙^{ねら}っているのは笑くぼだった。そう気がつく、万里子は急に自信が出た。

「三番のライト、上げて。そちらも全部スイッチ入れてくれ。よし」

ライトの熱気で冷房装置がなんにもならなくなった。万里子は、振袖と帯に包まれた上から灼^やきつけられて、胸から腹部、それに股^{また}から足まで、汗でぐっしりぬれてくるのが分った。耳の後にも、汗がったい落ちる。

「万里ちゃん、こっちを向いて。いや軀^{からだ}だけだ。顔の位置は前通りにして、チョッ、うまくないな」

先生が傍に来て、乱暴に両肩を掴んでポーズをつけた。彼の額が、また汗ばんでいる。幾度もレンズ越しに万里子を見ては舌打ちをして、

「気を楽にしてごらん。ああ、さっきの顔だよ。忘れちゃ困るなあ」

先生も空^{すき}っ腹^{はら}で、気が立ってきたようだった。

万里子は真剣に、気を楽にする努力をしていた。先刻見た黒島の写真のことなど、すっかり忘れていた。こんな空気の中で、思い出せる筋合いのものではなかった。

仕事が早いので有名な、職人氣質^{かたぎ}のカメラマンだったのに、門万里子一人を十二通りに撮影す

る間には、万里子のいいところ、美しいところ、魅力的なところを一心に探るわけだから、三月の中振袖からというものは、自分で探し出した万里子の魅力にすっかり自分で酔って、先生は撮影の道具立てに凝りだしてしまった。食事のあと三分も休憩せずに、またかかって、最後の五月のテニスコート・スタイルが終ったのは、夜もかなり更けた頃であった。

終始つきあっていたニューロンの宣伝部員も、見ていただけなのに、ぐったりと疲れていた。

「お疲れでしょう。衣裳は、お気に召したものを六点、どれでもお選び下さい」

チンピラ女優相手に、ずい分、腰の低い挨拶であつたが、どれでもと云っても着物やイブニング・ドレスは前以てお断りを喰っているから、結局のところ万里子がもつたのは、先生に褒められてゴキゲンのリゾート・ウェア以下、ニューロン製のワンピース、カクテル・ドレス、水着など、かさばりもせねば、あまり値もはらぬ簡単なものばかりだった。

「このくらいなら、お持ちになれるでしょう。ニューロンは軽くて、小さく折り畳んでもシワにならないのが特長です」

宣伝部員は眠そうな顔に似合わず、ニューロン繊維の宣伝を忘れなかった。万里子は、貰ったものなら、直ぐ自分の持物にしたいのが人情で、

「私、持って帰りますわ」

と、云っていた。

「万里ちゃん、御苦労さんだったね」

「あら、いいえ、先生こそ」

今後映画のスチールその他でお世話になると思えば、笑顔も見せる、お愛想の一つも云うのが当り前だった。万里子は、ていねいに頭を下げた。終ってみれば、心が弾み^{はじ}続けていたせい、あまり体は疲れていないようだった。

芸能界に關係ある仕事をしている人たちは、多く宵っぼりの朝寝坊である。婦人科のカメラマンなども、夜族の典型だ。先生は万里子が着替えて帰りの用意をしている間に、さっとシャワーを浴びて、仕事の汗を洗い落していた。どうやら、これから銀座のバーあたりへ出かけるつもりらしい。

「どう？ 万里ちゃん、ちょっと一杯やろうじゃないの」

「ええ、でも」

万里子は今もらったばかりの荷物のことを考えていた。それに十二時を過ぎた時間である。水谷監督の映画に抜擢される門万里子は、万事に慎重でなければならなかった。

「私、お酒いただけなんです。それに、もう、すごく眠い」

「ベビちゃんだな、じゃ、早く帰んなさい」

ニューロンがハイヤーを呼んで、万里子を送ることになった。車のシートに体を埋めて、やっぱり疲れたなと思つてるとき、

「御礼です」

水引のかかった金包みが、万里子の目の前に差出された。

受取つて、中身は改めなくても分つていた。手の切れるような一万円札が、五枚入っている筈